

ゴルフ用地に理想的な地形

コース設計者 井上 誠一（故人）

ここの最大の長所は、自然地形がゴルフコース用地として理想的であることでした。複雑な起伏があるにもかかわらず、いずれも1ホールの必要にして十分な幅を持った平坦地が尾根によって隔てられています。従って、各ホールはそれ自体で、自然のままセパレートされています。こんな素晴らしい用地は日本中を探しても恐らく得難いと思いました。事実、現在までのところ、その通りです。

そこで設計の基本方針として、極力、自然地形を生かして土工量を少なくし、かつウインターグリーンの設置を考慮におかず、高麗グリーン一本やりで行くことにしました。

自然地形を極力生かすレイアウトを採用した結果、大きな短所が出ました。グリーンから次のティーへの歩行距離が長すぎるという問題です。その中でも最も問題になったのが、17番グリーンから18番ティーへの連絡で、悪いことには18番ティー前150ヤード前後の所にフェアウェイを横切って所在した一筆の私有地が、地主さんの同意が得られぬため入手出来ず、仕方なく、その私有地の先に仮のティーを造って開場したため、17番グリーンからの歩行距離が更に長いものになっていました。

わずかな予算と土質（重粘土層）の関係で造形を端折った個所がいくつかありました。2番フェアウェイの段差も削り下げて、もっと平坦化を計るべきでした。15番ティー前の昇り坂の部分も削り切れぬまま客土を敷いて芝を張ってしまったのですが、これは開場後に削り直して今日の形になったものです。

とに角、戦後も問もない日本のゴルフ界の状況は誠に貧相なものでありました。発起人会でのお話では、コースさえ出来ればハウスなんか牛小舎程度で我慢するからとのことで、端折れる限り端折ってコース造りに励んだのですが、ハウスの設計の段階になって、折角立派なコースが出来のだから、牛小舎という訳にも行かぬと話が変わって、村田政真先生設計のあのユニークな形の素晴らしいクラブハウスが出来ましたが、コース担当の私共にすれば、それならもう少しコースの方に金をかけさせて貰いたかったなあ、と愚痴の一つも出る訳でした。

いずれにしても、東山の建設費は名古屋財界の長い期間にわたるご援助により賄えたものと伺っています。名古屋ならではのことに深く肝銘している次第であります。

（開場25周年記念会報から抜粋：原文のまま）